

眩き港の灯

059 鶴見大学附属中学校・高等学校 鉄道研究部

列車に揺られ横浜に着いた少年。生まれ育った故郷とはまるで違う。潮の香りと都会的で洗練された気配が鼻腔をくすぐる。

少し歩いた時、彼は思わず足を止め、上を見上げた。

「うわあ……！」

声にならなかった。

「あれが…！」

雲に届きそうなその巨塔は、夕暮れ時の光を浴び、故郷の裏山よりも高く見えた。

「本当に人が作ったのだろうか」

少年の胸は、未知の世界への畏怖と興奮で早鐘のように高鳴った。

さらに足を延ばし港の方へ歩いていく。近づくほど潮風が頬を撫でる。

すると夕闇の中にぽっと温かい明かりを灯した、重厚な建物が見えてきた。明治の風景がそのまま目の前に現れたかのようなだった。

「綺麗だなあ」

少年の口から純粋な感嘆がこぼれ落ちる。

近代的な超高層ビルとノスタルジックな街並み。それらが横浜の青い海を挟んで奇跡的なバランスで溶け合っている。

少年の瞳にはすべての光が、まるで宝石を散りばめたようにキラキラと映り込んでいた。



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品